

「氷室」巻頭句一覧

巻頭句〔各号の右の句は氷壺集・左の句は氷室集〕

・・・・・・・・・・・・・・・・

平成14年(2002年)

12月号

曝書して布令布告集捨てきれず
海際の眞葛原に海の風

沖繩 津波古行徳
長崎 大曲 幸代

11月号

穂芒やなべて険しき遠流道
苧殻焚く背に荒涼と日本海

島根 長塩 睦子
鳥取 谷 悦子

10月号

緑蔭一つ全校生を包み込む
水含む空の青さや七月来

長崎 田口 悠香
和歌山 市川 誠子

9月号

珈琲の深煎りを買ふ梅雨の街
蛍見るたれもさびしさ口にせず

奈良 長野 眞久
和歌山 市川 誠子

8月号

老鶯のときに省略して啼けり
更衣予後の軛の解かれざる

埼玉 斉藤もとじ
京都 富井 康夫

7月号

大山の悠々たるや薄霞
まぎれなく婚姻色の鱒飼へる

京都 柴田 靖子
京都 尾池 葉子

6月号

春の暮鹿のにほひの風が来る
もも組のみんなで植ゑし桜草

大阪 濱田美智子
京都 西辻 勇一

5月号

溶鉢炉の蓋開けしごと春夕陽
出雲路や雪踏みたがる土踏まず

京都 城島 千鶴
和歌山 三宅 つや

4月号

夫になき力瘤ある冬木かな

大阪 濱田美智子

狐火を舞はず太鼓をどどと打つ

京都

吉田みゆき

3月号

一切を省く平野の冬構

島根

泉 由嘉子

作務僧の落葉焚ききし香をまとふ

福井

山奥 巖

2月号

秋澄めり戦さ必至と思ふはなぜ

長崎

田口 悠香

味酒をいはうて三輪の神は留守

奈良

梅谷 和声

1月号

秋風や錨に乾く海の泥

埼玉

斉藤もとじ

旧石器と聞けば疑ふ鰯雲

京都

尾池 和夫

平成15年(2003年)

12月号

老僧の一喝に裂け椿の実

京都

今井 幸

古い母の長き咀嚼や秋の昼

京都

今井 幸

11月号

百姓が紋日の蓮を見てをりぬ

京都

川崎まこと

枝折戸や庭に膝折る夜の鹿

奈良

松村 孝子

10月号

空家より警官出てくる青嵐

奈良

長野 眞久

雪をはらひ青嶺となりぬ比良比叡

滋賀

村片 秀哉

9月号

神々に瞬くほたる灯りけり

和歌山

市川 誠子

敗戦日三番なりの南瓜煮る

長崎

和泉 光榮

8月号

泳ぎゆく梅雨の蟬に水動く

京都

松本 節子

正倉院事務所人無く実梅落つ

京都

川崎まこと

7月号

花の宴あぐらの中に子を埋めて

和歌山

三宅 つや

水満ちて島の棚田の初蛙

長崎

大曲 幸代

6月号

さざ波のあふれむばかり人丸忌
捨てられし雪の浮かびて流れけり

滋賀

村片 秀哉

京都

尾池 和夫

5月号

尾先まで猪開かれし寒さかな
河豚はねて魚箱動きみたりけり

京都

小野 耐

福井

山奥 巖

4月号

負け独楽の音のこもりて止まりけり
初詣猿田彦まで案内して

和歌山

中川 守

三重

加島 真琴

3月号

師の握手握りかへして冬ぬくし
葱積みて漁師立ち寄る風港

群馬

貝瀬 久代

三重

山中ひでの

2月号

魯田の水漬きみたる余呉の里
秋冷や駅に山伏待ち合はせ

京都

今井 幸

京都

尾池 和夫

1月号

家裏の葱抜きにゆく秋の暮
月見かとメール来たりし月を見る

京都

今井 幸

京都

尾池 和夫

平成16年(2004年)

12月号

襖絵の雁の降下や秋澄める
桔梗や切れ鮮しき俳句欲し

京都

柴田 靖子

京都

小野 耐

11月号

麴に噎せて濁世のほか知らず
秋暑し神馬向きあふこと拒み

奈良

長野 眞久

三重

竹内 正幸

10月号

野のほてり鎮めに夏の月上る
檳榔樹の葉擦れ夜目にも夏の潮

和歌山

石井 孝子

京都

尾池 葉子

9月号

一步二歩踏み込む藪の蛇莓

茨城

吉田 進

羽拔鷄影振り切つて駆け出せり

京都

松本 節子

8月号

山窪の靄流れゆき桐の花
風に鳴き白雲になき鴉の子

和歌山
滋賀

夏見起久子
村片 秀哉

7月号

陣離る水尾を伸ばせり春の鴨
轉や濡れ手で開く朝の窓

和歌山
和歌山

市川 誠子
市川 誠子

6月号

揚雲雀空にきざはしある如し
啓蟄の土竜の上げし土匂ふ

埼玉
和歌山

斉藤もとじ
川島美枝子

5月号

生涯を旅商ひの若布売り
蛇穴を出でてなまめく野となりぬ

島根
奈良

矢削みき子
新藤 公子

4月号

ははをらぬ庭の冬日の逃げやすし
破芭蕉鬼子のごとき実を曝し

京都
京都

今井 幸
尾池 葉子

3月号

極月の筆美しき無心状
極上の虹や時雨の去り際に

福井
京都

山奥 巖
尾池 葉子

2月号

秋天や「土足参内」門ひらく
鈴の緒の冬のぬくみを振りにけり

和歌山
群馬

市川 誠子
貝瀬 久代

1月号

秋果採る夕映え使ひ果たすまで
いちじくや白壁に日の黄ばみたる

京都
京都

西辻 勇一
川崎まこと

平成17年(2005年)

12月号

鹿鳴くや月は満ち欠けくり返し
秋風にあらざるはなし天の紺

鳥取
福井

矢削きみ子
山奥 巖

11月号

茄子の牛夕日に老いてゐたりけり
桐一葉犬の眠りを妨げず

奈良 長野 眞久
大阪 柳沢八重子

10月号

筒鳥や廃れし牧は野に還り
夕虹の消えしあたりの濡れてをり

京都 川崎まこと
京都 松本 節子

9月号

あるだけの鎌研ぎをれば夏燕
韓太鼓はつしはつしと夏来る

鳥取 谷 牧舟
京都 尾池 葉子

8月号

逢へばすぐ時遠ざかる螢の夜
かすかなる音積み重ね竹落葉

京都 浅香すみ子
京都 今井 幸

7月号

花の雨死ぬには少し淋しき日
悪党のひとり抜け出す花朧

奈良 長野 眞久
奈良 長野 眞久

6月号

歩まねば老ゆるばかりや青き踏む
涅槃図の哭き縮みたる象の鼻

埼玉 斎藤もとじ
奈良 長野 眞久

5月号

春光の混沌掬ひ紙を漉く
探梅の影より冷えて来たりけり

群馬 高橋千画子
京都 今井 幸

4月号

鱒酒が効きて思はぬこの強気
大胡座かきて三日の落語寄席

京都 城阪しづ子
奈良 長野 眞久

3月号

凍蝶の死にゐしことにこだはれる
懐手解くや一句を書きあぐる

福井 山奥 巖
京都 小野 耐

2月号

細き空雲にうづまり稲架襖
漢等に旧きえにしや芋煮会

京都 尾池 葉子
京都 大島 幸男

1月号

しなやかに猫あつまりて月見かな
南縁の母にまづ会ふ菊日和

埼玉 原澤 松乃
鳥取 谷 淑子

平成18年(2006年)

12月号

このあたり嗟峨や嗟峨野や秋耕す
昔日の川筋戻る秋出水

京都 尾池 葉子
神奈川 宮澤 淑子

11月号

かなかなや明るさ残る水の底
池尻に鯉のあつまる秋はじめ

京都 今井 幸
京都 尾池 葉子

10月号

梅雨晴や黄河の色にはたづみ
今年また汝のケルンに石置きて

京都 尾池 葉子
京都 大島 幸男

9月号

風に乗り風を乗りかへ竹落葉
城崎の寺に温泉飯場若葉風

京都 今井 幸
奈良 長野 眞久

8月号

新緑や仏足石に銭散らし
草山の早続きや雪加鳴く

京都 長野 眞久
兵庫 矢倉 修

7月号

刺し傷の指吸うてをり針供養
焙炉師の茶の葉に深く掌を入れぬ

京都 尾池 葉子
京都 小野 耐

6月号

水取や紙衣の肩を尖らせて
眼も染まる紀州の海や雛流し

奈良 長野 眞久
大阪 村上由美子

5月号

どこまでが土手どこからが枯野川
さざんくわへ自転車預け往診医

京都 尾池 葉子
和歌山 西 敬介

4月号

「チボー家の人々」旧りぬ煤払

京都 大島 幸男

新雪をかすかに汚しけものみち

福井

原

稔

3月号

大原の朝市露を買ふごとし
蕎麦刈るや鴉の通ふ空の下

京都
鳥取

尾池 葉子
谷 牧舟

2月号

寺門まで百歩の径や秋の雨
川が隔つ渡り鳥と稲雀

京都
島根

浅香すみ子
矢削みき子

1月号

行く秋や日差しを刻む音残し
秋草を常にいとしみ名を知らず

埼玉
和歌山

原澤 松乃
川島美枝子